

# C-19 ヨーロッパ服装史にみる被服構成の変遷と日本服との対比(第1報)

相模女大家政 ○近藤れん子 田中百子

目的 古代 *Egypte*・*Mésopotamie*文化にその源を發し *Grèce*・*Rome*に受けつがれて今日に至っている *L'histoire du Costume*は何時の時代でもその地方独特の風土気候や社会情勢がその背景になり、国情の発展と共に変化し単純構成の衣服も複雑に裝飾化され、年毎に改良されつつ前進してきたことは、その歴史の流れをみても明らかなことである。一枚の布地を身体に巻いていた古代から中世・18世紀を経て近代の *Paris mode*につながる西欧の服装の歴史を、その着装と裁断技法に焦点をおき、同時に日本の古代服である埴輪の服装から現代日本の“きもの”までのつながりを時代別に究明し、これらの東西服装の変遷過程の推移を比較検討することを目的とした。

方法 紀元前3000年頃の *Egypte*・*Mésopotamie*の服装は日本と年代的にずれがあり過ぎるため、日本古墳時代3<sup>rd</sup>頃と *Grèce*の全盛期、紀元前4-5<sup>th</sup>頃の服装から列記してみた *L'histoire du Costume*は *Paris*の *Musée Carnavalet*の *Vanier*女史の講義を主軸として *Paris*及びその近郊・*Athènes*・*Rome*等が入手した資料を基として研究した。

結果 日本の埴輪期とほぼ同年にあたる *Rome*の服装を比較すると、着装図及び構成線共に埴輪の方が立体的で機能度も高く、西欧では11<sup>th</sup>~12<sup>th</sup>頃まで見られない構造上の男女性別が既に認められた。又西欧では未開時代と云われた中世前期に、藤原時代の宮廷文化は絢爛たる繁榮をみせ、服装も日本国風時代に入っていた。その藤原期の服装の直線裁断法は今日まで和服の基本的源流として受けつがれているが、15<sup>th</sup>に確立した西欧の裁断技法はその後 *Paris*を中心とし年と共に著しく変革したのである。